



TITLE:

アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩学ージェンダーと作家性を中心にー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

麻生, 陽子

CITATION:

麻生, 陽子. アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩学ージェンダーと作家性を中心にー. 京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20117>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

| | | | |
|---|--|----|-------|
| 京都大学 | 博士（文学） | 氏名 | 麻生 陽子 |
| 論文題目 | アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩学 —ジェンダーと作家性を中心に— | | |
| <p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、19世紀前半のドイツの女性作家アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ（1797-1848）の作品における創作技法にジェンダーの観点から光をあて、彼女の「作家性」および詩学について考察するものである。</p> <p>本論文のテーマである「作家性、作者であること（Autorschaft）」とは、作品にたいして、発言意図をもつ権威という意味での精神的な権限や、著作権の所有という意味での法的、経済的権限を有することを意味する。「作者（Autor）」は、あくまでも男性を含意する性別化されたカテゴリーであり、それゆえそれ自体が女性をはじめ、名の知られていない少数派の作家を排除し、それを容認するメカニズムとして機能していた。男女の性差に明確な線引きがなされる以前、「作家性」は、個々人を超える統一的な連関のなかで捉えられていたが、それは18世紀後半以降、男女の性差が二項対立的な確固たるものとされるにつれて、性差にもとづく文学的な「天才」や「創造性」といった観念とともに、男性を中心とする自律的で創造的なものとされるカテゴリーへと変質していった。そのような理念のうえで女性は、文学的な創造の場においては、書く主体からは排除された存在として、あるいはもっぱら男性の作家が描く客体として位置づけられてきた。作品にたいする権限である「作家性」とは、男性が女性を自由に意のままにすることのできる権限と呼べるものでもある。当時の書く女性は、「作家性」をはじめとする男性中心的な構想にたいしてどう対応したのだろうか。また、そうした男女のあいだで非対称的に構築された規範を内面化することなく、女性がみずからの主体性をあらたに確立しようとする場合、それは女性の視点からどのように位置づけられることになるのだろうか。このような女性の作家性の一端をあきらかにするべく、本論文は、19世紀前半に創作活動を行っていたドロステという書く女性を考察の対象とする。</p> <p>本論文では、ドロステが創作をはじめた頃から晩年にいたるまでに、様々な文学形式に依拠して書かれた作品をたどることで、作中にみられるテーマ的な連関や文学的モチーフの書き換え方などのパターンを考察し、女性というジェンダーを逆手にとって描きこまれた、性別という枠組みにとらわれることのない創作の可能性をあきらかにする。詩人としてのデビュー以降、書く女性であるという意識をもって創作を行っていたドロステの作品では、所与の文学的なモチーフ等の書き換えを通して、芸術創造をめぐる当時のジェンダー規範との緊張関係が表現され、そこではさらに、男</p> | | | |

女という二項対立的な性別の枠組みを超えた書く主体の構築、さらには、女性という性別をはじめとする時代の制約からも自由な作家のあり方などが模索されている。ドロステの作品におけるこうした大胆な試みは、女性であることと芸術をめぐる葛藤、あるいは「天才」概念をはじめとする男性を中心とする文学的な伝統と不可分なのである。

第1章では、シラーやゲーテのテキストを再構成した、身分違いの男女の恋愛物語という体裁をもつ未完の悲劇『ベルタ』（1813/14）を扱う。そこでは、非対称的に価値づけられたふたりの両性具有的な男女の姿を通して、芸術家存在の主体のあり方自体が孕む問題が浮き彫りにされる。女性にとって到達しがたい芸術への憧れは、18世紀後半以降、自由を象徴する理想的なトポスとみなされていた「アルプス」の隠喩であるフェルスベルクという男性の芸術家によって表現されている。芸術の領域を体現するこの人物は、男性性と女性性をあわせもつ両性具有的な男性の芸術家として表現されている。二項対立的なジェンダーを克服する男性の両性具有性は、伝統的に「天才」芸術家を特徴づける要素であったのにたいし、両性具有的な女性、異形のもののよう否定的に捉えられている。しかし見方を変えれば、この否定性は、女性もまた芸術の領域に参加する主体であることを裏づける要素として考えられるものである。

このように表むき恭順にも似た態度で、非対称的なジェンダー規範が刷り込まれた所与の形象のうちに表現の可能性を忍ばせようとする試みは、セクシュアリティという点でゲーテの『コリントの花嫁』（1797）を書き換えたバラード『ローデンシルト嬢』（1840）にも認められる。第2章では、あらゆる社会秩序や規範からの逸脱者である女吸血鬼を、「男性の詩人（Dichter）」が理想とした「天才」から排除された「女性の詩人（Dichterin）」の表象として捉え、本作ではオリジナルな「天才」にたいする揶揄が表現されていることを指摘する。さらにそこでは、吸血女という鏡像を通じて、みずからの内に隠された完全なる存在のあり方にたいする潜在的な願望に自覚的になったヒロインの狂気じみた姿もまた描かれている。女性において狂気は、完全なる生存のあり方からは疎外された、吸血鬼的な生ける屍同然の状態からの復活の兆しをしるしづけている肯定的な要素にはほかならない。

第3章では、叙事詩『医者（Dr. Murr）の遺言』（1838）を取り上げる。医者（Dr. Murr）の告白という体裁のもと、本作では、男と女、医者（Dr. Murr）と患者、書き手と読み手など、諸々の存在の境界が攪乱される様子が描き出されており、そこではジェンダー規範によって性別化されたテキストの境界が歪められ、融合されている。さらに本作には、ほかの作品とは異なり、生身の吸血鬼的な「書く」女性が登場する。分身および吸血女というモチーフに依拠して描かれた、テオドーラという女性は、盗賊の首領の男に刺傷を負わせた可能性の高い人物であると同時に、医者（Dr. Murr）というこの現実世界で許容された書く男性の内面に沈潜する衝動の実行者、すなわち分身である。一方、男性の医者

も、自身の内面世界が擬人化された分身と対峙することによって、テキストにも似た分身らと同様の姿へ、すなわち生死の境界に立つ患者から死者へと変容する。さらに、テオドーラによるナイフを用いた殺傷行為とペンで書く行為、刺傷を負った身体と文字が書かれたテキストとがそれぞれ同質のものとして描写され、19世紀後半以降のモデルネの文学に特徴的な、テキストと書く行為のあいだの緊張関係もまた表現されている。そして医者が書いた遺言は、女性のペンで書かれたテキストの隠喩である。遺言という19世紀に入り法的拘束力を失ったテキストはしかし、書き手の死後も読者の未来に多大な影響を及ぼすものへと書き換えがなされており、医者自身、死後も遺言に潜在する亡霊にも似た語り手として、その読み手となる生者の運命に介入をつづける。こうして書き手の死後に遺されたテキストが、後世において読者に及ぼす効果の描写には、公の場での発表を視野に入れて創作をはじめたドロステの、不特定多数の読者の存在にたいする意識が反映されており、それは詩人としてデビューを果たして以降、ますますつよく意識されていく。後世からみずからが遺したテキストの余生を俯瞰するドロステの視点はまた、彼女の書き手としての関心が、書く男性のあり方が標準とされた時代における書く女性の位置づけから、文学が読者に迎合するものに変質しつつある同時代にあって自身のテキストがどうあるべきか、という問いへと移行していることを示している。

同時代の文学の傾向や作家としての栄誉の獲得に左右されることなく、自身の詩学に忠実に創作を行う姿勢を貫くのが、第4章の『ペルデュー！』（1840）に登場する「文学かぶれの女」と呼ばれるティーレン夫人である。「文学かぶれの女」という言葉は、19世紀初頭に書く女性が文学の世界に参加するようになってもお依然として存在する、そうした女性たちにたいする蔑視を示している。しかしながら、同時代の著名な男性の「桂冠詩人」以上の才能をもつティーレン夫人は、「文学かぶれの女」という侮蔑的な肩書きを気に病んではない。彼女はこの名に異議を唱えることなく、屈従の態度で引き受け、同時代にたいする迎合を頑なに拒絶しながら、同時代から潔く降りるほうを選ぶ。それは、自身が理想とする文学が受け入れられない同時代の状況や、自身につきまとう「書く女性であること」によって被る制約から解放された自由な状態を意味している。

ドロステの理想的な自画像として造形されたティーレン夫人の創作姿勢が実践されていると思われるのが、第5章で分析する、彼女のライフワークであった小説『ユダヤ人のブナの木』（1842）である。最終的な解決を拒み、多義的な解釈の余地を残した、いわば反犯罪物語である本作は、「うぬぼれた」同時代あるいは同時代の読者の趣向を逆なでするように、読者にたえず自己省察を強いている。すべてを一望のもとに包括する、超越的な視点の持ち主であるドロステは、犯罪物語という装いのもと、立場を異にする一人称の語り手をみずからの共犯者にすることで、同時代の読者を早急な裁きへと誘惑しながら、序詞において裁きの禁止を警告する。同時代の読者に対

峙し、女性を含む「誰でもない者」にたいして倫理的な主張を発するべく本作を根底で支えている創作技法が、人物間にみられる分身／鏡像のモチーフであり、ホメロスの『オデュッセイア』や聖書、叔父の手になる記録文書など、解釈の糸口となる様々な先行テキストである。それらを自身の詩学にもとづいて大胆に再構成して作中に取り込むことで、先行テキストのオリジナルな意味を相対化するドロステのテキストが生まれる。テキストが成熟した同時代の文学市場のなかで商品として読み捨てられていくことに懸念を示したドロステは、かぎりある命しかもたない作者としてのあり方ではなく、くりかえし読まれるテキストの永続性にこだわって創作を行ったと推察される。

ジェンダー規範を含む時代の制約から逃れ、それを掻い潜ろうとする、ドロステが追求した創作のあり方は、彼女が依拠した先行テキストや所与のモチーフとの距離のとり方自体において表現されている。彼女は様々な文学ジャンルを選び取ることによって、文学的な野心や、伝統を継承する詩人としての立場を表明すると同時に、所与のモチーフや先行テキストを再構成してものを書きつづけた。ドロステの作家性は、自身の書き手としてのあり方を問いの形で書きつづけることのうちに存在したのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀前半のドイツを代表する女性作家アネット・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ（1797-1848）の文学を、ジェンダーと作家性という視点から考察したものである。ここで「作家性」という訳語があてられている「*Autorschaft*」という言葉は、あるテキストの作者であることを意味するが、論者によると、ドロステの時代の文学において、「作者（*Autor*）」とは男性を含意する性別化された概念であり、文学作品を書く女性は、自らの作家としての主体性を、女性の立場から新たに確立する必要があった。こうした女性作家の自己意識のあり方を、ドロステの作品を手がかりにして浮き彫りにすることが、本論文の目的である。むろん、ドロステの文学をジェンダーの観点から論じた研究は、これまでも少なくない。こうした先行研究の成果をふまえながら、論者は、ドロステの初期から晩年へといたる様々なジャンルの作品を丹念に読み解き、女性の書く行為をめぐる自己省察が、彼女の文学を貫くライトモチーフをなしていることを明らかにした。そのさい、伝統的な文学ジャンルやモチーフを受け継ぎながらも、それを女性の視点から書き換えることによって、彼女は当時のジェンダー規範とのあいだの緊張関係を表現すると同時に、そうした規範を掻い潜り、性別という枠組みをはじめとする同時代の文学の制約にとらわれない創作の可能性を追求しようとしたというのが、本論文の結論である。

本論文のすぐれた学問的成果として、とりわけ次の3点を挙げることができる。

論者は、従来の研究ではあまり論じられなかったドロステの戯曲作品から、彼女の女性作家としての自己理解のありようを読みとっている。第1章では、ドロステの初期の未完の悲劇『ベルタ あるいはアルプス』（1813/14）において、二人の男女が体現する両性具有性が、非対称的に価値づけられていることが示される。男性性と女性性をあわせもつ男性芸術家フェルスベルクが、「天才」の理想像をなしているのにたいして、芸術家をめざす女主人公ベルタは、周囲の人たちから「両性類」として否定的に捉えられる。だが同時にまた、そのような否定性をわが身に引き受けながらも、芸術創造への希望を語るベルタのうちに、若いドロステは、女性が芸術に参与する可能性を託そうとしたというのである。第4章では、晩年の喜劇『ペルデュー！ あるいは出版人、詩人、そして文学かぶれの女たち』（1840）が論じられる。文壇諷刺劇の体裁をとったこの作品では、世間にもてはやされている男性作家たちが揶揄される一方で、女性作家たちは、周囲から「文学かぶれの女」という蔑称で呼ばれている。だが、そのなかにあって、女性作家ティーレン夫人は、男性作家をはるかにしのぐ才能をもちながらも、そうした蔑称を意に介することなく、世間に迎合することを拒否して、時代の表舞台から降りてゆく。ここに論者は、同時代の価値規範から解放され、「100年後に読まれる」ことをめざしたドロステの自己投影を見てとっている。いずれの章も、ドロステ研究のみならず、19世紀ドイツの女性作家研究にもまた新たな知見をもたらす貴重な研究成果である。

本論文のもう一つの特色は、ドロステの作品にしばしばあらわれる分身や女吸血鬼

のモチーフを、彼女の女性作家としての自己意識の表現として読みなおした点である。第2章では、女主人公が自らの吸血鬼的な分身との出会いによって変貌をとげるさまを描いた物語詩『ローデンシルト嬢』（1840）が分析される。論者は、あらゆる社会秩序や規範からの逸脱者である女吸血鬼を、女性詩人のメタファーとして捉え、この作品の主人公は、分身との出会いによって、自らの潜在的な願望に目覚めるのだという。周囲の人たちから「狂ってしまった」と呼ばれながらも、嬉々として踊り続けるローデンシルト嬢のうちに、論者は、失われた全体性の回復の兆しを読みとるのである。第3章では、叙事詩『医者 of 遺言』（1838）が取り上げられる。この作品では、老医師が、盗賊の首領の臨終の場に、謎めいた女性テオドーラとともに立ち会ったかつての体験を、息子への遺言として書きのこす。論者はここで、医者とテオドーラが互いの分身をなしていることに着目する。すなわち、ペンで遺言を書きしるす医者と、ナイフで首領の身体を傷つけたとされるテオドーラが重ねあわされることによって、医者が書く女性のメタファーとなると同時に、男女のジェンダー間の差異が攪乱されるのである。いずれも、論者の読みの鋭さを示す斬新な解釈である。

ドロステの代表作である小説『ユダヤ人のブナの木』（1842）に新たな読解を試みた第5章もまた、本論文の特筆すべき成果である。これまでこの作品がジェンダーの観点から論じられることは少なかったが、論者は、女性、子供、ユダヤ人など、社会の周縁に位置する弱者たちに光が当てられているという点で、この小説もまた、これまでの作品と同じ問題意識を共有していると主張する。犯罪物語の素材を受け継ぎながら、真相の解明が読者に委ねられる「反犯罪物語」へとそれを書き換えることによって、ドロステは、罪ある者を裁こうとする市民たちに警告を発するとともに、作品を一義的に解釈しようとする読者たちに自己反省を促そうとしたという論者の解釈は、この作品をメタ文学として読みなおす試みとして、注目に値するものである。

とはいえ、むしろ本論文にも、欠点がないわけではない。様々なジャンルの作品に目配りをきかせようとした結果、ドロステ文学の中核をなす抒情詩にかんする論述が、いささか手薄になっている感は否めない。また、大胆な解釈を提示しようとするあまり、論証がやや性急になっている箇所も散見する。だが、こうした点も、本論文の学術的意義を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2017年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。